川崎市立小学校体育研究会

麻生支部研究会だより ～Asao's Room～

令和6年11月

麻生支部授業研究会

11月6日（水）に南百合丘小学校にて麻生支部授業研究会が行われました。ご多用の中、多くの方々にご参加いただきありがとうございました。今年度も麻生支部の研究領域である「器械運動　マット運動」での授業を通して、マット運動の機能的特性や、マット運動の楽しさを広げるためのアーティスティックマットについて考えていくきっかけとなる授業研究になりました。研究討議では、多くの方から意見や感想をいただき、活発な意見交流ができました。

麻生支部研究テーマ

自己と仲間のよさや課題を見付け伝え合う体育学習

～考えを共有する活動を通して～

手立てとしてのアーティスティックマット

●楽しさの幅を広げ、マット運動を楽しむ姿（する、見る、支える、知ることの楽しさ）

●めあてをもち、課題解決に向かう姿（互いに見合い、伝え合うことで、個の技の上達への意欲を高める。）

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力。

研究討議

〇意見　★授業者、麻生支部

視点①

アーティスティックマットについて。手立ての有効性。関わりや取り組んでいた技、ICT の活用

〇マットに否定的な子供たちの姿から、前向きに取り組むことのできる子供たちの姿に変容していた。

〇めあてごとの練習の時間では、友達の動きを直接見ながら声をかけている子や ICT（スポテク）を駆使しながら課題を解決しようとする子など、課題に向かう姿が多くみられた。

⇒★体育の授業だけでなく、日ごろの授業から、何を学ぶのか、どのように学ぶのかなどの学び方を指導している。また、めあてと振り返りを大切にし、常に課題解決学習になるよう心がけてきた。

〇後半のアーティスティックマットになると、前半に練習していた技が繰り返しや組み合わせ技の中に入っていなかった。めあてがアーティスティックマットにつながっていなかった。

⇒★前半に練習していた技をアーティスティックマットの中に組み込むことのできるような場を設定したり、教師がどこで前半の技を入れていけばよいのかを伝えたりしてもよかった。技ができるようにするための思考を大切にし、組み合わせ方などは教師が伝えてもよい。

視点②

子供と子供、子供と教師をつなぐ言葉かけや場の工夫。

〇見合いの際、何を見ればよいのか明確になるとよかった。

⇒★出来栄えに注目して見合うのか、音に合わせているのかを見るのか、人と合わせるとよいのか。繰り返したり組み合わせたりする中で、「友達」または「音楽」と同調しているか。最初と比べ、その時間内に課題解決ができたかなど、見合う視点を明確にもち、課題解決に向かう姿にできるとよい。

〇子供たちが、課題解決学習から外れないよう、途中で全体を止め、少しのできたを認める指導や課題解決するための場について指導したことで、思考を促し、子供たちの動きが変わっていった。

成果

・日ごろの授業から学ぶ楽しさや課題解決について指導されていることが子供の姿から見て取れた。
・マット運動に消極的な子供たちが、前向きに取り組む姿があった。
・授業前半のグループで見合い教えあいをしながら、課題解決をすることができていた。また、GIGA 端末（スポテク）を駆使しながら、課題解決している姿が見られた。
・GIGA 端末を活用することで、友達同士の見合いが生まれていた。
・教師の段階的な指導と価値付けによって、子供たちの活動が明確になっていた。
・アーティスティックマットを行うという目的が明確で、見通しをもって取り組むことができていた。

課題

・頭跳ね起きやロンダートなど前半の活動が後半の連続技につながっていなかった。
・授業後半も課題解決学習にしていくために、グループとしての課題の明確化は必要。
・アーティスティックマットになってからの子供たちの見合い教えあい（関わり方）は教師のねらう姿だったのだろうか。
・運動の楽しさを味わわせるためのアーティスティックマットは適切であったのだろうか。

指導講評：大曽根 実先生 （川崎市立小学校体育研究会副会長 川崎市立向丘小学校 校長）

〇学習指導要領に則りつつ、児童の実態と教師の願いを考えた授業づくり

・教科の目標を意識し、体育としての見方・考え方を働かせて豊かなスポーツライフを実現するための資質能力を育んでいきたい。
・運動の特性を味わえていたか、運動の楽しさを味わえていたかを考え、どちらも味わうことのできる単元構成を考えていくことが大切。
・「する・見る・支える・知る」の多様な運動との関わり方と関連付けながら、運動の楽しさや喜びに触れることができるようにする。

〇アーティスティックマットについて

・学習指導要領にも「自己やグループで繰り返したり、組み合わせたり」と明記されている。技の組み合わせ方も例示として示されている。そのため、アーティスティックマットを行うことは学習指導要領に則った指導となる。また、「する・見る・支える・知る」の4つの関わり方の視点で見てもアーティスティックマットは「関わりを広げる手立ての一つ」として考えていくことができる。
・アーティスティックマットを子供たちにどのように示していくのかがとても大切である。単元のはじめ？途中？出すタイミングによって資質能力を育むのによりよい手立てとなるのか、今回の実践を経て、慎重に考えていく必要がある。子供たちの実態に合わせた単元構想を考えていく必要がある。
・全員が B 評価を目指す授業づくりを考えていきたい。

担当：池崎 彰吾（栗木台小） 文責：中島 真知子（柿生小）